2018 年度第 2 回　総合系科目担当者連絡会筆録

授業運営の共有・改善策

日時：2018 年 7 月 20 日（金）18 時 00 分～ 19 時 15 分
司会：河野 哲也（総合系科目構想・運営チームメンバー／文学部教授）
参加者：2018 年度全学共通科目担当者

河野（司会）　本日は総合系科目の担当者連絡会へのご参加、ありがとうございます。これからフロアディスカッションを行います。本日いらっしゃっている皆さんは、学内の先生をはじめ、学外からの先生、またこれまで本学で教鞭を執られていた先生、それから初めて本学で科目を担当された先生など、いろんな方が参加されています。秋学期に向けて、これまで疑問に思ったり、不安になったりといったようなことがありましたら、ここで率直な意見交換と、また経験豊かな先生からは改善策のアドバイスをいただきたいと思います。早速ですが、授業の運び方について何か質問やご意見、あるいは授業でお困りの点や心配な点がありましたら伺いたいと思います。いかがでしょうか。

受講生のどの層に焦点を当てて授業を進めるか

参加者 A　宗教系の科目を担当しています。受講生のどの層に焦点を当てて授業を進めればいいのでしょうか。

河野　全学共通カリキュラム（全カリ）は 1 年次生から 4 年次生まで、形式的にはすべての学生が履修できることになります。しかしながら、授業によっては 1 年次生が多い授業、それから上の学年が多い授業というのはあると思いますが、皆さんいかがでしょうか。

参加者 B　哲学関係の科目を担当しております。私も長年、全カリを担当してきました。私の経験では、毎年 3 分の 1 から半分は 1 年次生、その半分くらいは 2 年次生、そしてその半分くらいが 3 年次生で、残りが 4 年次生といった学年構成の傾向がありました。ですから基本的には 1 年次生に分かってもらえるということに主眼を置いて授業をしています。ただし、リアクションペーパーなどを見ますと、3 年次生、4 年次生の中には、学部の専門科目を勉強して、それとの兼ね合いで批判的にいろいろ書いてくれる学生もいます。次回リアクションペーパーを紹介するというときには、そういう学生の反応を重視して紹介をし、また、授業の中でそういう特定の学生の関心、あるいはそのレベルを求められている部分もあるということを意識しながら、1 年次生には少し難しいようなことを混ぜたりすることもあります。ご参考になりますでしょうか。

河野　いかがでしょうか。専門科目だと学年が上がっていくと、前半の基礎的な知識を積み上げていけるわけですが、例えば哲学というご専門だと、理学部の学生は 1 年次生と 4 年次生で理解度は違うものなのでしょうか。

参加者 B　哲学の知識に関しては、それほど違わない場合もあります。ただし 4 年次生は、例えば物理学科の学生などは非常に哲学に近い関心を持っていまして、それなりに物理の理論との関係を問うてくるようなリアクションペーパーも見られます。そうした違いはありますが、哲学の知識に関してはそれほど差がないため、まずはその基本をしっかり押さえてもらうということと、先ほどのリアクションペーパーに対する回答などでフォローしています。

河野　こちらからお尋ねしたいのですが、1 年次生に教えるときと 4 年次生に教えるときとどのような違いがあるとお考えでしょうか。

参加者 A　まず大学に入った時点で、高校のときに世界史を履修していなかったという人もいるわけですね。4 年次生の場合は、ある程度大学の期間の中で世界史的なことを学んでくる学生が多いので、自然と教えられること、教えてもすぐ分かってもらえる場合と、教えても分かってもらえない場合とがあります。さらにそれに専門的なものを付け加えるとなると、基礎的なものができていないと、なかなか教えるのが難しいと感じることがあります。

欠席学生への対応について

参加者 C　「学びの精神」や「多彩な学び」で、芸術関係の授業を担当しています。毎年聞いていることで大変恐縮なのですが、立教大学は「一切公欠制度はない」ということを聞いておりますが、実際の現場では、欠席届のような書類を持ってくる学生がいます。昨年度は東京六大学野球が盛り上がったこともあり、野球関係のさまざまな証明書、あるいは年末になるとメサイアのようなクリスマス行事のものなど。バッサリと、一切駄目だということにしてしまっていいものなのか、それとも何らかの考慮をした方がよいのか、その場合は何をすればよいか、皆さんにご意見をお聞きしたいと思います。

河野　もちろん伝染病などの場合は、公欠というよりも出校停止になりますので、それとは別で、今おっしゃったような正課外活動などによるものに関して、何かご意見がございましたらお願いします。

松山　総合系科目構想・運営チームリーダーの松山です。私が配慮するのは、履修要項にある追試験の条件に当てはまるもの…先ほど河野先生がおっしゃったようなインフル

エンザや忌引き、それから就職活動において選考上、必須の面接くらいです。その他のものについてその都度認める／認めないということをやっていたら、学生からのクレームや不公平感を訴えられる雰囲気になってしまいます。学生には、そういう欠席をする予定があるのなら、その分出られるときは全部出てくださいと言っています。ただし、私の場合は「何回以上出席しないと試験は受けさせません、単位をあげません」ということはやっていません。リアクションペーパーの内容と、期末試験の成績を 50％／50％で評価しています。

河野　ありがとうございます。まったく公欠扱いはしないけれども、欠席日数が何日を超えると駄目ということはしていないということですね。ほかにいかがでしょうか。

参加者 D　芸術系科目を教えている者です。公欠扱いがないというのは分かっているので、仮に総長名や他の学部の先生の名前と印鑑が押してあるようなフォーマルな用紙が出されても、「これは欠席扱いだっていうのは分かっているよね」とまず学生の顔を見ながら確認をします。そうすると大抵の学生も実は分かっていて、顔が引きつってくるので、「じゃあ、そういうことで」とお引き取りいただくのが一番よろしいかと思います。大体理由を見ていると、単に観戦するとか 1 年次生だから片付けのお手伝いに行くようなことが書いてある場合も多く、そうすると「それは欠席しなきゃいけない理由でもないよね」と確認すれば分かると思います。ただし教育実習に関しては、前もって聞いていれば、後でフォローの手立てをします。私も出欠の回数をそんなに厳しく取っているわけではないので、学生の過度な不利にならないような形を、学生と確認を取りながら採っています。

河野　ありがとうございます。私は文学部教育学科の人間ですので、教育実習は授業の一環であり、卒業要件ですので、授業自体がバッティングしているという解釈になります。その場合には、やはり欠席は欠席ですけども、その分レポートなり、資料や短い書き物を提出してもらうというフォローをしています。また、文部科学省が課す試験が、動かし難く、絶対に出なければならないということが結構あります。これも私たち教育の内部、教育同士のバッティングであると考えて、そこは考慮しています。ただし、正課外活動に関しては、大学あっての正課外活動ですので、私は認めてはいないですね。普通の欠席として扱っています。

パソコン、タブレット、スマートフォンの使用を認めるか

参加者 E　キリスト教学関係の兼任講師をしております。学生のパソコン使用はどういう位置付けになっているのかお伺いします。スマートフォンはマニュアルに「授業前に電源を切るように指導してください」と書いてありますが、パソコンの使用は禁止され

ているのか、どうなっているのでしょうか。

河野　最初に私のほうからこういう場合もあるということで紹介したいと思います。今、聴覚しょうがいの学生が私の授業を履修しています。彼女に関しては、教員の話した内容を変換してパソコン上に文章が出るような機械を利用しています。また、利き腕を骨折してしまった学生が、通信のできないパソコンでテストを受けたということがありました。そういう特別な場合を除いて、パソコンの使用に関してご意見をお聞かせください。

参加者 F　パソコンを使っている学生はよく目にしますが、今ご紹介にあったような理由だと分かりやすいのですけれども、私個人は割と視聴覚資料を使うということもあり、発光する物はやめてほしいと呼びかけています。しょうがいなど、特殊な事情がある場合は、逆に知っておきたいと考えます。

河野　今、私が述べたような特殊な場合は、もともと教務事務センターが介入していますので、最初から私のほうにも、あるいは先生のほうにも「こういう学生が授業に出ます」という説明が行きます。これは非常に数少ないケースです。

今回の担当者連絡会参加に際して伺ったアンケート結果を見てみると、パソコンよりもスマートフォンの使用について悩みがある先生が多いですね。授業中はスマートフォンを使ってはいけない、電源を切りなさいということになっていますが、学生のスマー

トフォン、パソコン、タブレットなどの使用に関して、普段お困りのことがありましたら、率直なご意見をお願いします。

参加者 G　私の場合、パソコンやタブレットに関して、本当はどうなのか分からないですが、基本的にまさにオフィススタイルで、ノート代わりに使用しているのだったら認めています。しかし、スマートフォンの場合、例えばワードを使うなど事実上ノート代わりにはできないだろうと考えます。だから、スマートフォンと、パソコン、タブレットは、少し分けて考えたほうがいいのではないかと思います。

参加者 H　他大学の先生の例ですが、かつて板書をスマートフォンでパチパチ撮る学生がいて、その先生は認めていましたが、学生の座っている位置によって撮りにくいという声があがり、あるときから先生自身が自分の板書を撮って、自分で SNS にアップしているそうです。スマートフォンで板書の写真を撮ることについては賛否両論があり、これは先生の個性によるものだろうと思うのですが、スマートフォンでの板書撮影を許すにしても、確かに先生が撮るというのは一つのアイディアだと思います。

参加者 I　スマートフォンで板書を自分で撮影してアップロードするくらいだったら、初めからパワーポイントをアップロードすればいいのではと思いますが、これはやはり教員の個性だと思います。私は以前、自分の講義資料を Chorus（「コーラス」…web 上の授業支援システム）に―今だったら Blackboard ですが―アップロードしていました。しかし、私が授業前に自分で資料を作ってアップロードすると、ものすごく膨大な量になってしまい、どうも学生は付いてこられない、消化できないという感触を抱くようになりました。板書でできるのが、学生が付いてこられるギリギリのペースで、そうすると教えられる内容も少なくならざるを得ないのですが、スピードコントロールという観点からすると、パワーポイントなどの資料をアップロードするというのも、学生に対して負荷が大きいのかなという印象はあります。

河野　資料を事前にアップロードして話すと内容がどんどん増えていくということですよね。ほかにスマートフォンなどの使用に関してお困りの件はありませんか。

参加者 J　これは困っているというものとは別の次元の話になってしまいますが。私は立教ゼミナール発展編という科目を担当しています。パソコンにせよスマートフォンにせよタブレットにせよ、学生が発信できるツールなので、例えばディスカッションがうまく成立しないだとか、なかなか質問が出てこないというときに、そうした学生の持っている通信用のツールを使って、ディスカッションをしている例や、また他大学で LINE を使って授業をやっているという事例を聞いたことがありますが、そういった形で逆に活用している事例があればご紹介いただければと思います。

河野　大変重要な話だと思います。むしろポジティブに使うことを実践されている先生がいらっしゃいましたら教えてください。

参加者 K　英語を担当している兼任講師です。スマートフォンと相性がいいのが、TOEIC の授業だと思います。どうも学生はスマホの時代になってから、すぐに答えが合っているかどうかを知りたいという傾向が強いようで、黙ってずっと聞いていることに耐えられないという学生が結構います。そこで Google フォームを使い、例えば TOEIC のリスニング問題 5 問を解いたら、答えを送信してもらうようにしています。Google フォームだと、「A が正解だが、C の解答者のほうが多い」というように、一瞬でグラフ化できます。間違っている傾向が強い問題に関しては、長めに細かい解説をして、正解者が多い問題は、時間をかけずに次の間違っている問題の解説をするというように統計的に利用することで授業を効率化したり、学生が送った瞬間に何点取ったかが分かるので、分かっているか／分かっていないか疑心暗鬼になることがなくなり、お互いに納得できる双方向の授業ができるのではないかと思っています。

河野　私もクリッカーというツールを使ったことがあります。ただ、配るのが大変なので、何回かやってやめてしまったのですが、そのときは、学生の理解度がよく分かり、アンケート的なものも取れるので、非常に面白いなと思いました。

参加者 K　クリッカーより、Google フォームが優れているのは、問題を QR コードでスマホに読み込ませることができる点です。そうすると、一瞬にその画面になって、解答を送信することができます。

河野　それは素晴らしいですね。ほかにはどうでしょうか。

参加者 L　数学関係の授業を担当しております。少し論点がずれるかもしれませんが、最近の学生さんは、答えはすべてウェブに書いてあるという信仰がすごいですね。授業をやったあとに、「はい、この授業を聞いたら、ウィキペディアにどのくらい間違いがあるか分かるでしょ。このフォームについてウィキペディアの間違いを指摘してらっしゃい」という課題を出したら、学生は引いてしまったみたいですね。ネットは確かに調べるときに便利な道具ではあるのだけれども、ネットに載っているものの限界みたいなものを教えるのが、やはり全カリの仕事ではないのかと思います。

河野　一種のネットリテラシーということですよね。ネットに載っている私のウィキペディアの経歴が間違っているとかね。ほかにネットの利用の仕方に関して悩みや、面白いことができた事例などがありましたら教えていただきたいのですが、いかがでしょうか。

参加者 M　経済学部で授業を担当しています。私語や途中退席が望ましくないのは分かるのですが、スマートフォン自体が望ましくないと思っていらっしゃる先生がどのくらいいるのか、聞いてみたいと思います。私自身は正直言って、自分がしゃべっているのにスマホを見られるのは面白くないので、基本的にはやめさせていますが、いや全然構わないという先生もいらっしゃるかと思います。

河野　では、授業中スマートフォンを使っていても全然気にならないという人と、気になるという人を挙手で聞いてみたいと思います。……大体半々くらいですかね。気にならないという方にお聞きしたいのですが、どうして気にならないのですか。

松山　先ほどその前におっしゃった、私語や途中退室の問題のほうがはるかに大きくて、スマートフォンで音を出さないでやっているのだったら、私はそのほうが周囲の迷惑にもならずにましだと思います。ただし、学生がスマホ依存に陥ると、自ら記憶しようとか、何かを考えようとかしなくなり、スマホが外付けハードディスクみたいな感じで脳の機能を停止・後退させる装置のように作用するのではないかという危惧が私にはあります。だから、授業運営上スマホを容認する一方で、スマホをやめさせて授業に集中させることは、本来の脳の機能を活性化させるよい機会でもあると感じています。

河野　やや消極的に認める意見でしたが、肯定的に認めてくださる人はいらっしゃいますか。

浅妻　全カリ副部長の浅妻です。私は法学部ですが、条文はスマートフォンで見たほうが速いので、そちらのほうがよいと思います。本職の弁護士さんたちが電子媒体で条文を見るのはすごく辛くて、紙のほうが速いのですが、学生に「六法全書」を買えとは言えないということと、学生が普通買う「ポケット六法」などの小型の法令集では、民法や憲法など基本 7 法科目以外の科目の条文は載っていないことも多く、対応できないということがあります。そうするとやはりインターネットのほうが便利なので、スマートフォンの使用について、私は推奨しています。ただ、私はスマホを持っていませんが……。

河野　持っていらっしゃらないのですね。それでは逆に、気になって仕方がない、嫌だという方のご意見をお聞きしたいと思います。

参加者 K　先ほど、TOEIC の授業でのスマートフォン利用について話をしましたが、スマホを使うようになったのは、スマホに対抗するにはスマホしかない、つまり、みんなのスマホで同じものを見て授業をすれば、それ以外のことをする余地がなくなるのではないかと思ったからです。授業中は自分のスマホをスクリーンに映していますが、もし学生が違うものを見ていたら、「あなたのスマホ画面を教室の大画面で映すからそのつもりでいてくれ」というふうに毎回警告をしています。

私語と途中退室への対処法

河野　さて、先生方からアンケートを取ったときに最も問題だとされているのが、先ほど松山先生からご指摘があった私語、それから途中退室です。私語と途中退室は必ずしも同じことではないのですが、これらでお困りのこと、あるいは私はこんな方法で授業を静かに保っているという事例がありましたらお聞きしたいのですが、いかがでしょうか。

参加者 N　素朴な質問ですが、皆さまの授業では、そんなに私語がひどいのでしょうか。こういう形で議題が出てくるということは、いろいろな所でかなり授業破壊に近いようなことが行われているのかなと再認識しました。というのも、私の担当した授業はものすごい、何かもうお通夜みたいな感じで静かでした。私自身がやっていて、「少しくらいざわついてもらったほうが、むしろやりやすいな」と思うくらいにしーんとしていました。こういう話題が出てくること自体、私自身少し信じられないところがありまして、それでお伺いさせていただきました。

河野　私語に関しては、「私の授業ではまったくありません」という先生も相当な数いらっしゃいます。一方で、かなり困っているという先生方もいらっしゃるんですね。私

語は授業妨害にあたることもあるわけですが、それでもなかなか自覚されない場合も多いのではないでしょうか。逆に言うと、私語が多い授業の先生に対して何かアドバイスのようなものがあれば、教えていただきたいと思います。

参加者 B　人の話を静かに聞くということを大学生に期待するのは無理だと思います。私は、かつて新座で 300 人を超える授業を毎年やっていたこともありましたが、基本的に私語はないように授業をしています。100 人を超える授業ですと、第 1 回目の最初はザワザワとしていることが多いんですよね。また 1 年次生の多い授業だと、初めてだからどんな先生かなと思って緊張してしーんとしている場合もありますが、そうでない場合もあります。私は初めが肝心だと思っていますので、とにかく静かになるまではしゃべらずに待っています。そして、この授業は静かにならないと先生はしゃべらないんだということを、まずは覚えてもらうようにしています。それでも、授業が始まれば、ぼそぼそっと 2、3 人でしゃべるようなグループがあちこちにいたりします。そういう場合は、話をやめます。切りが悪い所の途中でやめると、学生たちも「あれ、どうしたんだろう」と周りを見回すとどこかでしゃべっている学生がいて、そちらへ視線が行くわけです。そういうことを繰り返しているうちに、学生はほとんどしゃべらなくなります。さすがにある程度大人なので学習してくれるみたいです。そうなると、もうほとんど私語を気にする必要はなく、こちらのペースで話ができます。

河野　ありがとうございました。ほかにアドバイスなどはありますでしょうか。

参加者 O　私語の対策ではないのですが、私は総合系科目で、新座で 200 人くらいの授業を担当しております。そこでは、私もざわついていたら黙るまで待っているとか、あるいは少しでもしゃべっていると「何かありますか」と聞くと、みんな静かになったりするので、とにかく静かです。ただ、先生も先ほどおっしゃったように静かすぎるのが私も辛く、むしろワイワイやってくれたほうがやりやすいと思っています。

私がむしろ困っているのは、途中退席する人がとても多いようなのです。私は全盲のため、TA の方にお手伝いいただいていますが、聞くところによると一番初めにハンディターミナルで出席をとると、そのあとすぐに抜けていって、リアクションペーパーを書いてもらうときになると、非常に立派な連絡網があるらしく、みんな帰ってきて、とても立派なリアクションペーパーを書くのです。ほかにもいろいろ聞いてみると、授業中にスマホをやっている人とか、突っ伏して寝ている人とか、いろんな人がいるらしいと。一度はどうやら堂々とトランプをやっていた人がいたようで、そういう通報を TA の方から受けたことがあります。それで私は、特殊な例なのかもしれませんが、授業中に問いかけたのです。「私のような目の悪い者の授業で、どうせ盗む目もありはしないのだから大胆に変なことをやっていいんだという人がいたとしたら、別に私はばかにされているとか失礼だとかいう気はしないけれど、そういう人は自分で勝手に自分が恥ずかし

い人間になっているんだよ。だけど、私はやっぱり皆さんには恥ずかしい人間になってほしくない」というふうに。特に新座の場合は、コミュニティ福祉学部の学生が多いので、「私のような者の授業では、少なくともそんなことをやったら痛むような心は持っていてほしい。それは障害者が教えているから、かわいそうだから心が痛むのではなくて、私のような者の前で心が痛むようなことは、他のどの先生の前でもやってはいけないことのはずです」というふうに言っているのですが、それがどれだけ伝わっているのかというのが不安です。

それから、学生からなかなか反応が返ってきません。特に TA の方にマイクを回していただいて「質問はありませんか」と聞くと、マイクが回ってきた人がすごく嫌な顔をしたり、舌打ちしたりして、「すごく怖い」と TA の方が言っていました。「リアクションペーパーを読んで、名指しすることもあります」と事前に言ってあるのに、「これを書いてくれた誰々さん、ちょっと意見補足していただけませんか」と言っても大抵答えが返ってこない。こういうことをどうしたらいいかというのが、私の一番の悩みです。

河野　いくつかのご意見が入っていたと思います。途中退席をどうするのかということと、今言ったみたいに逆に名指しで発言させるときに苦労があるという。いかがでしょうか。

松山　私も今年度、途中退席については非常に困りました。授業の中盤になってから出て行って、なかなか戻ってこない学生がいました。私は 300 人くらいの規模の授業をやっています。そのときに気分の悪い人は、言わないでもトイレに行っていいですよとか、保健室に行っていいですよと事前に言っているので、そういう人たちが少しいるのは事実ですが、今年は中盤になってものすごくたくさんの学生が出て行って戻ってこない。それで「出て行くときには必ず教壇の前を通って、そこの横の所に紙を置いておくから学生番号と氏名を書いてから出て行きなさい」と言ったら、次の授業から出て行く人がゼロになりました。

河野　私の授業の場合、学生を指して話してもらう形式が多く、それに対して心理的に負担となるような人がいたら、最初から TA に教えておいてほしいと言っています。それで、その代わりに書いてもらって私が読み上げるというふうにしています。また緘黙症（かんもくしょう）という学生も中にはいます。そうした場合は除いて、舌打ちしたり、理由もなく不平不満を言う学生に対してどうしたらよいでしょうか。

参加者 K　先ほども発言しました TOEIC を担当している者です。黙って授業を聞いているのは、ひょっとしたら日本の文化かもしれないと思いました。アメリカの大学の場合、学生は意見を言うつもりで先生の話を聞いています。そのため、アメリカの大学の先生は、学生が意見を言い過ぎるのが一番の悩みだと言っているそうです。一方で日本

の先生は、学生が黙って聞いていることが一番の悩みだと……。授業を受ける前提が違うという、それが文化なのかもしれないですけれど、やはり「英語の授業のときにだけ、外国にいるように意見を言ってください」と言っても、消極的な学生はいます。またディスカッションにおいても意見を出してくださいという雰囲気を作ろうとしますが、「この時間だけは意見を言ってもいいんだな」という関係性をうまく作っていかないと、静かになってしまうということを感じています。

河野　確かに意見を言ったり議論したりするというカルチャーが中等教育までにほぼないので、大学に来て急にやってくださいと言ってもなかなか難しいのかもしれません。そうすると、最初の設定が必要であるというお話になるかと思います。

石渡　総合チームメンバーを務めています、コミュニティ福祉学部の石渡です。私は学生が発言すると加点するという形を採っています。授業での発言を積極的に加点するとなると、テストの割合を高くして難しめに設定しているのではといううわさも出て、そこで点を取っておくと有利だという意識が働き、誰に発言してもらうか迷うくらい積極的に手を挙げるようになります。

河野　生意気なことを申し上げると、やはり評価をしていないから手が挙がらないのではないかと思います。話したり議論したりすることに関して評価をしていないので、評価外のことには参加しないのであり、それをきちんと評価するようにすれば、今言ったように積極的に手が挙がるということなのだろうと思います。

　さて、残念ながらもうお時間が迫ってきてしまったのですが、最後にあと一つくらい、ここでどうしても皆さんとの間で意見を共有したい、あるいは聞いておきたいということがありましたらお願いします。いかがでしょうか。

全カリ受講生の適性人数と教室の割り当て

参加者 P　芸術系の科目を担当しています。何年か担当させていただいていますが、全カリの授業はすごく受講生の数が多いと感じます。受講生の数が少ない授業も持っているのですが、人数が少ない授業だと起きない問題が、大きい教室の中だと起きるということがあると思います。お伺いしたいのは、最初の授業で教室がほとんど満員になることがありますが、学生から「教室が狭すぎるので変えてください」というふうに毎回苦情が来まして、事務局の方に相談すると、「どうしても教室はありません」「この教室で続けてください」というふうによく言われます。教室の大きさに対して適正な学生数はあると思いますが、その点については事務局ではどのようにお考えでしょうか。また、例えば私の授業だと毎回 300 人程度いるのですが、300 人を対象に授業をするのはなかなか難しいところもあります。1 科目あたりの受講生の最大人数をどのようにお考え

なのかお伺いできますでしょうか。

河野　では、教務事務センターからお願いします。

教務事務センター（職員）　教室数が非常にひっ迫している状況にあるというのが正直なところでして、2 限、3 限は特に厳しくなっています。授業の定員の設定については、全カリで確保した教室を 300 人の上限にして、300 人以下の教室については 90 何パーセントを履修人数の上限というような形で配当しています。そのため、教室に学生がびっしり入ってしまい、隙間がないような形でやっていただかざるを得ないというのが実状です。

全カリはすべての学部学生に開かれていますので、かつては 500 人あるいは 1,000 人を超えるような科目がありました。その中で、全カリとして静粛性を保つことや、適正なクラスサイズ等を考えていった結果、300 人という上限ができたという経緯があります。逆に言うと 300 人を切るような教室設定をしてしまうと、全学共通カリキュラムが全学部学生の受け皿として成立することが難しくなるという事情があります。また、教室の形態もさまざまです。本日の会場は横長の教室ですが、実にいろんな教室があり、芸術系の科目でスクリーンの形態などにも指定があったりすると、なかなかすべての要望をお受けしきれないという現状があります。そこは全カリ事務室と教務事務センターとで丁寧に対応しながら、できるものは対応していきたいというのが、事務局の思いです。

河野　いかがでしょうか。教室の形だと、奥に長い教室は人数が多いと後ろのほうの参加度は低くなりますよね。また奥が長いと見えにくいし、極端に言うと私語をしていてもここまで聞こえません。教室の形も大きな問題だと思います。

教務事務センター（職員）　そうですね。横長が好きな先生と、奥に長いほうが好きという先生もいらっしゃって、そこは次年度の時間割を決める際にお伺いする資料でご要望を書いていただければ、ひっ迫して非常に苦しい状況ですが、可能な範囲で対応させていただきます。

河野　この問題は、ここで解決することは難しいので、継続して私たちのほうで考えていきたいと思います。それでは担当者連絡会全体のまとめとして、総合チームリーダーの松山から挨拶をさせていただきます。

まとめ

松山　最後に問題になっていた授業規模や教室についてですが、先生のご事情が許せば、

1 限に開講していただくと 2 限・3 限よりは規模を抑えられ、教室も割と希望が受け入れられますので、ご利用ください。

私どもも常日頃から授業の中で気にしていることはたくさんあるのですが、具体的に問題を上げていただいて、先生方の個々の解決策などを直接拝聴して、非常に参考になりました。

私はもともと私語に対してものすごく厳しく対応しています。私語に対して厳しい先生の授業は、静粛性は割と高く保たれます。しかし、途中で諦めている先生の授業の静粛性は、やはり低くなります。本日も意見がありましたが、最初が肝心と言えるでしょう。今年度の私のある授業で、ささやくような声が周りから聞こえると、先生の大きな声が聞こえなくなるというようなタイプの軽度の難聴の学生がいまして、その場合、耳栓をして小さな音をカットし、大きい音をやっと拾うというような工夫をしないと聞こえないということを教えてくれました。それ以降、私には聞こえないような小さな声の私語でも口が開いていたら、必ず注意をして対応しています。私語は小さな声でしゃべっていても周り数十人は非常に迷惑をしているということを、毎回のように言っています。

私は授業の始めにいつも、卒業要件単位数と 4 年間で払う授業料から、この 2 単位の 1 つの授業だけでこれだけお金を払っているという計算式を提示します。そうすると 1 回 90 分の授業で、文系の学生は 5,000 円、理学部の学生は 7,000 円を払っていることになります。私の授業は 300 人規模ですので、90 分 1 回で 160 万円がそこに投入されているわけです。それだけの価値のあるものに対して、それを毀損するような行為は許されないということを話しています。分かってくれる学生もいますが、それで

も「蛙の面に水」みたいな学生もいますから、その都度注意していく以外はないと思います。

　皆さん、今日はいろいろ意見を出していただき、非常に有意義なディスカッションとなりました。ありがとうございました。